

## 公開講演会

**漆のついた土器** 出土する漆付着土器には、杯、皿、盤、壺、甕など、多くの器種がある。漆付着土器を大量に出土した遺跡の例を分析した結果、細頸の壺は漆の原液を入れて原産地から消費地にもたらしたもので、甕は貯蔵用、広口の盤は精製用、杯、皿の食器類はパレットとして塗装を行ったものというそれぞれの土器の用途を明らかにし、奈良時代における漆工芸の様子を、新たに考古遺物の面から検証した。また、正倉院文書の検討から、工房には漆の原液を搬入し、そこで精製、調合を行っていたことも判明し、漆を大量に消費する工房での漆製品の製作は、漆が非常に高価であることから、官の後援などが無ければ困難であったであろうことを推定した。漆の原液には、運搬具の壺の形態、胎土から見て、多くの産地がある。運搬具には、郷名、貢納者名、内容量という木簡と同じ内容の墨書を記したのものがあることを初めて示し、漆が税の一種として国家の統制の下にあったことを明確とした。これは、漆の付札木簡が出土していない現状では、貴重な事例である。 (玉田芳英)

**古代建築における庇について** 発掘調査で庇を持った建物が検出されるが、庇といってもその構造は様々であることを述べ、都城遺跡の例を中心に時代変遷を示した。古墳時代には、すでに付加的な構造(空間)としての庇と、後世の民家の下屋と称するべき庇がある。7世紀には寺院建築として構造的に定型化した庇が大陸から流入し、特に四面庇のありかたに注目する必要がある。その後各種の庇が複雑な発展をみせ、大きな流れとしては庇が構造的に定型化するようになり、空間としての庇の取り扱い方にそのことが示されている。また、発掘遺構、諸資料から庇の空間的性格を検討すると、古代建築における庇の性格は必ずしも一様ではない。最後に、発掘成果以外の資料から復原される庇の平面形式は多種で、発掘時および遺構検討段階において、従来の認識にとらわれずに庇を認定し、遺構の検討をする必要性を述べた。 (島田敏男)

**考古学から見た古代の金属生産** 平城宮式部省東役所において発見された鋳銅工房は、古代の鋳銅作業工程を不十分ながらも推定・復元できる貴重な事例といえる。奈良時代後半に操業していたこの工房において特に注目できるのは、青銅製品の鋳造とともに、銅地金の精製も行っていったことである。ここでの操業工程は大きく見て、3つの段階から成立していたと推定した。それは、発見された工房の内部が3つの区画に分けられること、それぞれの区画に異なる型式の炉ないしは焼けた小穴が附属することなどから、これら3つの区画が一連の作業工程を示すと考えられるからである。その中で、最初の工程に位置付けることのできる炉―火床炉―を用いて、銅地金の精製を行っていたと考えた。この炉の地下構造は、長登銅山などで発見された製錬炉に相似し、この最初の工程は銅山の製・精錬技術と密接な関連を有していると見ることができる。この鋳銅工房で展開していた精製工程は、正倉院文書に見える「冶熟」の工程に含まれると考えられることも、合わせて指摘した。 (小池伸彦)

**科学で探る古代金工の世界** 現在我々が一般実用的に用いている鉄や銅などの金属のほとんどはすでに古代において出揃っている。しかも鋳造や鍛造などの製作技法の基本テクニックもすべて古代に登場しているといつてよい。古代金工には、勘と経験で培われた古代工人の手の技が遺憾なく発揮されている。まさに「古代のハイテク」と呼ぶにふさわしい。発掘によって出土した古代の金工品も製作当初は丁寧に仕上げられていたのだろうが、長年月の土中埋蔵のため生じたさびや汚れのため、本来の輝きと色を喪失してしまっているのが常である。このようにさびと汚れによって隠蔽されてしまった金工品の素顔を探るためにも、今後もさまざまな科学機器を用いた材質や構造の調査を地道に積み重ねていく必要がある。それによって初めて、古代から現代に至る金工技術の歴史の変遷を明らかにすることができるであろう。保存科学的研究の重要性もここにあるのである。 (村上 隆)